
世界の守護者

black1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の守護者

【NZコード】

N5410S

【作者名】

black1

【あらすじ】

人間界で唯一人々が暮らすアレイズ大陸のとある集落で過去を忘れ、のんびりと暮らす主人公、レオン。だが、ある日集落の長老から頼まれた仕事のせいでレオンは戦いの渦に巻き込まれていく・・・。

8/26 2章の内容と1章から6章までのタイトルを変更しました。

まじめ

この作品を読むにあたって二つ注意があります。

まず一つ目は、作者は気まぐれな人物なので更新が超不定期です
でして承ください。

二つ目は、誤字、脱字が多いので指摘して貰うとありがたいです。

三つ目は、この作品は初めての作品なので途中で話の内容がおかしくなることもあるかもしれませんがそこはスルーしていただいて結構です。

最後に、できるだけ感想などをいただけると嬉しいです。

それでは作品をお楽しみください。

1章 依頼受諾（前書き）

初めての作品なので変なところもあるかもですがよろしくお願ひします^_^

1章 依頼受諾

そこは人間界の中で唯一人がすんでいる大陸、“アレイズ大陸”的北部に位置する魔法都市エンティミオン郊外にある“聖地”と呼ばれる森の集落。

その“聖地”でレオンは長老に呼び出され走っていた。

長老の家に着くと、長老と友人のクラウディが待っていた。

「すみません、遅れました。それでなぜ俺達は呼び出されたなんですか？」

とクラウディが聞くと、長老は

「これを見てみなさい。」

と言つて手に持つた槍を渡した。

「何このボロイ槍？」

「長老これはなんですか？」

レオンとクラウディそれぞれがこいつと、

「それは昔、“神の化身”が使つたとされる伝説の武具の一つで“グングニル”という。この槍は投げた者と槍の間で動くもの全てにさまざまな攻撃魔法を降らせるという武器だ。それで君達を呼び出した理由だが、戦闘の技術の高いお主方にこいついた絶大な破壊力

を持った伝説の武器が戦争で使われる前に集めて欲しいからじゅや。やつてくれるか？」

「 もうひと…それで、伝説の武具はどこにあるんだ？？」

「それは様々な伝承などを調べれば分かるだろ。」

「分かりました、やつましょー。」

「では『氣』をつけて。」

そしてレオンたちの旅は始まった。

1章 依頼受諾（後書き）

読んでくださいありがとうございました！
誤字、脱字などがあつたら教えてください。
それと感想をもらえると嬉しいです。

2章 検索開始

聖地を後にしたレオンたちは“伝説の武具”的情報を集めるため、
エンティミオン魔法都市へと向かつた。

レオンたちは歩きながら雑談を始めた。

「なあクラウディ。俺あんまり聖地を出したことないんだけど、いきなり魔法都市なんて行つていいのかよ?」

「問題ないよ。俺は結構聖地を抜け出して二つあるし、長老からお金ももらつたしな。」

「せうか。・・・そういうやクラウディってなんでこんなめんどくさい依頼なんて受けたんだ?」

「俺は面白そうだったからだ。それで、レオンは?」

「俺は記憶を取り戻すためだ。」

「記憶を取り戻す?」

「ああ、あの後長老に“伝説の武具”の中には記憶に干渉するものもある。つていってたからな。もしかしたら10歳までの記憶を取り戻せるかも知れない。」

「・・・せうか。まあ頑張るつー。」

「ちひるさんー。」

やつしてゐ内にレオン達はエンディミオン魔法都市に到着する。

「想像してたのより凄いな。」

「突つ立つてないで行くぞ。」

「行くつてどーじ?」

「エンディミオン魔法図書館だよ。あれにはエンディミオン中の書物が集められてるらしいからな。」

エンディミオン魔法図書館に着くと早速レオン達は古文書を調べ、3つの“伝説の武具”の場所を見つけることに成功した。

「クラウディ、最初はどうに行く?」

「じゃあここから一番近いストラセル湖に行こう。」

「“魔剣”か。一体どんなのだろ?」

そしてレオン達はすぐにストラセル湖へ向かった。

2章 検索開始（後書き）

読んでくださいありがとうございます！
誤字、脱字などがあつたら教えてください。
それと感想をもらえると嬉しいです。

3章 湖の番人（前書き）

やつとみ話題ですー。

ここから徐々に長くなるかも知れませんがよろしくお願ひします^_<

3章 湖の番人

「意外ときれいな湖^{みずうみ}だな。」

レオン達は伝説の武具を探すために魔法都市エンディミオンを西に10kmほど行つたところにあるストラセル湖に来ていた。

「あんまり気を抜くな。本当かどうかは知らないけどここには水龍がいるみたいだし。」

「わかつてゐる。じゃあとりあえず湖の中を探すか?」

「やつするしかなそつだな。」

そう言つとクラウディイは持つてきた荷物の中から金属製の短剣を抜き、同じく金属製の長さが250cmもある大きな剣を背負つ。

「クラウディイ、お前もしかしてそんなもん背負つて湖に飛び込む気が?」

「もちろん、まあでも水中で魔法使つから大丈夫。」

「やついう問題か?」

そしてクラウディイは湖に飛び込もうとしたが、“なにか”の頭がクラウディイを喰らひぬつとして水の中から出ってきた。

クラウディイはそれを左に跳躍してかわし、グレートソードを構える。

「レオン、雷系の魔法で援護してくれ。」

「わかった。」

そつ言ひとレオンは空中に魔方陣をかき呪文を唱える。

「我・雷神の力を借り、稻妻を放つ。ウェーカサンダー、発動！」

呪文を唱えると魔方陣から雷が直線上に放たれ、水龍にあたりそうになるが半透明な赤い壁のようなものが現れ、雷の魔法をかき消す。

「くそ、こいつ対魔法障壁持ちかよ。」
アンチマジックファイアード

「レオン、このままだとこっちが不利だ。しばりこいつを引き受けてくれるか？俺はその間に魔劍を見つけてくる。」
レーガアテン

「わかった。頼んだぜ。」

そしてレオンは長さが90㌢ほどの太刀を取り出して構え、水龍と相対し、クラウディは水中へと飛び込む。

3章 湖の番人（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

次回も頑張って早く書けるようになります！！

4章 始まる覚醒（繪畫版）

やっと書けました^_^

今日は若干長めです。

4章 始まる覚醒

「どうあえずここが湖に潜らなによつにしないと。」

そう言つとレオンは太刀で水龍の顔を斬りつけるが硬い鱗に弾かれ、一旦距離をとる。

距離を詰めるよつに水龍は陸に上がる。すると今まで見えなかつた全身が見える。

首と尻尾は長く、4本の足はヒレではなく水かきがついて口には鋭い牙が煌いでいる。

レオンが水龍を観察していると水龍は大きく息を吸い込み、体内で高圧力をかけた水を放つ。

「水！？」

水龍の放^{はな}つた水をレオンはとつさによける。見ると、放たれた水は湖の周りにある木々を難なくなぎ倒している。

「すごい威力だ。当たらぬようにしないと。」

そう言つとレオンは水龍の左側に回り込むが、水龍は左腕を振り払いレオンを襲う。

「しまつ」

水龍の攻撃を避けきれず、構えていた太刀もろともレオンは吹き飛ばされ木に叩きつけられる。そしてその衝撃でレオンの意識は遠のいていく。しかしその時レオンの中で何かが“目覚めた”。

倒れたレオンはなぜか髪と目の中の色が黒から赤に変わる。

そしてすぐに立ち上ると太刀を持って水龍に向かつて走り、斬りつける。

今度は弾かれずに鱗もろとも水龍を切り裂く。

だが太刀にはひびがはいり、もう一度斬り下としたところで粉々になってしまふ。

「ちつ、脆いな。 しょうがない、 “アレ” を出すか。」

そしてレオン（？）はやつまくと右手を空に掲げる。

「我・封印を解き召還する。来たれ、魔剣レーヴァテイン、神盾アイギス！」

すると湖から炎を纏つた剣が、南の方から輝く盾がそれぞれレオン（？）の方に飛んでくる。

魔剣を右手で、神盾を左手で取り水龍に向かつて疾走する。

水龍はそのレオン（？）にまたも高圧力をかけた水を放つがレオンは神盾で防ぐ。

そのまま勢いを殺さずにレオン（？）は水龍の額に魔剣を突き刺す。

しかしその後に急にレオン（？）の髪と目の中の色が元の黒に戻る。

元に戻ったレオンは剣を水龍の額に突き刺している自分に驚いた。

(気を失つてからいつたい何が起こつたんだ?)

そう思つてゐる時にクラウディが陸に上がつてきた。

4章 始まる覚醒（後書き）

感想・間違いなどがあつましたらぜひ教えてください。^-^

5章 能力発動

「レオン、その剣つてもしかして……。」

クラウディは湖から上ると来たときには持つてなかつた剣について何かを言いかける。

「わからない。けどもしかしたら魔劍レーヴアかティンも知れない。」

「さうか。じゃあエンドイミオンで詳しく調べるか。」

そいつ言つてクラウディは来た道を戻りつとする。

「あ、ちょっと待つてくれ。行く前にこの水龍を“喰いたい”んだけど。」

レオンがそう言つとクラウディは戻ってきて湖の近くにある森の木にもたれかかつた。

「早めにやつてくれよ。」

許可がでたのでレオンは水龍に近づき、右手で水龍の体に触れる。

「『神喰手』発動！」

『神喰手』、それは相手の全てを奪うことのできる能力。

発動条件は相手に直接触れていることと、相手が生きていないと。

それと、相手を喰らう代償に、使用すると喰らつた相手が強ければ強いほど、激しい痛みが全身にはしり、自分の力を超えたものを喰

「おひとかると、死に至ることもある。

すると、レオンの右手に穴ができる、水龍の体が粒子に分解されて穴に吸い込まれる。

水龍の体を全部吸い込むを穴は勝手に閉じ、レオンはうずくまる。

（くそつ。こつものことだが、この痛みには慣れないな・・・。）

全身に激しい痛みがはしるが、レオンはそれに必死で耐える。

「毎回大変そうだな。」

「・・・・もう大丈夫だ。行こう。」

しばらくすると痛みは消え、レオンとクラウディアはエンティミオンに向かう。

そして、10kmの道のりを再び歩き、レオン達は無事にエンティミオンに辿り着くと、宿に泊まり体を休めた。

だがそのころ魔法都市エンティミオンを南に50kmほど言った所にあるアリア帝国や、世界にたくさんの団員を持つとある騎士団でも秘密裏に伝説の武具集めを始めていた・・・。

6章 別行動（1）（前書き）

1ヶ月ぶりの投稿です><

6章 別行動（1）

宿で休んだレオン達は手に入れた魔剣レーヴア ティア イギスと神盾レーヴア ティア イギスが本物なのかを確かめるため、予定通り再びエンドレイミオン魔法図書館に向かつていた。

しかし、レオンがその途中で何かを思い出したかのよつ口を開く。

「なあクラウディ。この魔剣レーヴア ティア イギスと神盾レーヴア ティア イギスをどこかに隠さないか？こんなもん身に着けてたら盗賊とかに狙われるぜ。」

「そうだな。騒ぎになると不味いし“迷いの森”にでも隠すか？」

“迷いの森”とは魔法都市エンドレイミオンの東にある森である。その地形は複雑で、その上手じわいい魔物アイギスが住んでいて入つて出てきたものがほとんどないないことからそつ呼ばれている。

「じゃあちょっと“ゲート”使って行つてくるからその間に魔剣レーヴア ティアと神盾レーヴア ティアのことを調べてくれ。」

「わかった。」

そしてクラウディはエンドレイミオン魔法図書館に向かつていった。

「あとと、俺も行くか。」

レオンはさういつと宙に魔方陣をかき、呪文を唱える。

「我・魔力によつて空間の法則を変え発動する。開け、ワールドゲート。」

するとレオンの前に3メートルほど黒い門が現れる。

その門を開け、中に入ると眼前には森が広がっていた。

そう、ワールドゲートは一種の転移魔法なのだ。
ただし、行きたい場所の座標がわかつていないとうまく門がその場所に繋がらない。

また魔力の消費が多く、普通の魔法使いや魔術師には扱えないものである。

「しかし、見るからに不気味な森だな。」

まよいの森からはじめぞましい叫び声が聞こえてきて、レオンは足を止める。

「あ、そういうえば太刀を買い換えるの忘れてた！武器がないと魔物達の相手はきつねうだな。」

だがそんな言葉とは裏腹にレオンは森に入っていく。

「まあいいか・・・。きつねはビヤバイってほびじやないだりつ。頑張つてみるか。」

そしてレオンはどんどん奥へ進んでいく。

6章 別行動（一）（後書き）

感想などできれいな文章を書くのが好きで、お題に沿って書くのが得意です。

7章 別行動（2）（前書き）

毎回投稿遅くてすみません^_^

7章 別行動（2）

森に入ったレオンは気配を消し、魔物に見つかれないよう意氣をつけてながら進んでいった。

そしてしばらくしたところでレオンは洞窟を見つけ、たいまつを持ち、中に入る。

少し歩くとすぐ行き止まりになつたいたのでそこで立ち止まる。

「よし。ここら辺でいいかな。元々この森に入る人なんて全然ないといし。」

そう言つとレオンはたいまつを置いて護符を取り出し、魔劍と神盾に貼り付ける。

「封印の護符よ。封じられし力を解放し、対象を封じよ。」

すると、魔劍と神盾が黒く染まっていく。

それを確認した後レオンは持ってきた荷物の中から白い箱を出し、魔劍と神盾を入れ、蓋を閉める。

箱の蓋を閉めるとレオンは呪文を唱える。

「開けるものに災厄を『えよ。パンドラ、起動。』

レオンが呪文を唱えると白い箱にはいくつもの魔方陣が同時に展開されていく。

「よし、後はここから出るだけだ。」

そう言って洞窟から出るとレオンは一匹の小柄な龍に出会ってしまった。

「なんでこんなところに龍が！？」

レオンは見つけられたとわかつた瞬間に魔方陣を展開しようとしたが、相手がすごい勢いで突進してきたので慌ててかわす。

かわした直後にレオンは魔方陣を展開し終え、目を閉じる。

「我・光神の力を借り、全てを覆い尽くす光を放つ。フラッシュ、発動！」

すると魔方陣から閃光が放たれ、レオンのほうを向いていた龍は目が眩んでしまう。

「今のうちに逃げないと。」

そしてレオンは全力で走り、森の出口を目指した。

同時にクラウディ^{クラウディアティニアギス}は魔剣と神盾のことが書いてある古文書を見つけ、手に入れた2つの“伝説の武具”が本物であることがわかつたのだが・・・。

「おかしい・・・。確かにあの神盾^{アイギス}は本物だ。でも、なぜアリア帝国の南にある洞窟に封印されていると記述されているものがあんなところに・・・？」

そしてクラウディはしばらく考え込む。

「まあとりあえず、レオンが戻つたら魔劍レーヴァティティギスと神盾ディアイギスが本物つてことだけ伝えておくか。」

そしてクラウディは今度は“伝説の武具”とは関係のないものを調べ始めた・・・。

8章 もう一つの“力”

レオンは出口へ向かつて全力で走る。

だが後もう少しで森から抜けれるといつひりで一つ田の巨人、サイクロプスと遭遇してしまう。

「おいおい、『冗談だろ?』この森にはこんなのもいるのかよ!？」

レオンがそんなことを言つている間にもサイクロプスは右手に持っている木の棍棒を振り下ろしてくる。

「おつと。」

レオンは攻撃に巻き込まれそうになりながらも何とか棍棒を避け、魔方陣をえがく。

「我・火神の力を借り、燃え上がる炎を放つ。ウォームファイヤー、発動!」

すると、半径10cmくらいの火球が魔方陣から発生し、一直線にサイクロプスに飛んでいく。

しかし、サイクロプスは火球に当たっても気にせず突っ込んでくる。油断していたレオンはその体当たりに直撃して吹き飛び、近くにあつた木に叩きつけられてしまう。

(くそつ。こうなつたら“アレ”を使うしかないか……。)

「『姿解放・火龍』発動!」

「『フルムリース

『解放』は『神喰手』で喰らつた“力”を解放し、自分のものとして使う能力である。

また、『解放』には、

喰らつた者の姿を解放する、第一段階『姿解放』
喰らつた者の魔力を解放する、第二段階『魔力解放』
喰らつた者の能力を解放する、第三段階『能力解放』
喰らつた者全ての力を解放する、最終段階『全解放』
の5つの段階があり、後の段階になるほど体力の消耗が激しく、使用できる時間が限られてくる。

『姿解放』を使ったレオンはその体を火龍のものへと変えていく。

そしてレオンは大きな翼、強靭な4本の脚、長い尻尾、燃える火のような赤い鱗を持った龍へと姿を変えた。

9章 圧倒的な“力”

龍となつたレオンの無形の力の波動に木々がざわめく。

「ゴワアアアアアオオオオオツ！」

火龍とレオンはサイクロプスに向かつて咆哮する。

その瞬間木々のざわめきが、猛獸・怪物たちの鳴き声が止み、森は一気に静まり返る。

そしてその強靭な4つの足を使いサイクロプスへと突進する。

サイクロプスは棍棒を突進してくるレオンに向かつて振り下ろすが、龍の鱗の前では歯が立たずへし折れ、サイクロプスはレオンの突進に直撃し倒れる。

武器を失つたサイクロプスはすぐさま立ち上がり追撃を加えようとしているレオンから5mほど距離をとり、近くにあつた大木を無理やり引き抜き、構える。

しかし、火龍となつたレオンの危険を察知したのか警戒して近づいてこない。

（近づいてこなくなつたか・・・。この状態のそんに長く継続させれないし、そろそろ逃げるか。）

「ゴワアアアアアアアアアオオオオオオオオオ！」

レオンはもう一度サイクロプスに向かつて咆哮をし、大きく息を吸う。

そして、サイクロバスに向かつて火球を放つ。

サイクロバスは大木で防ごうとするが火球は着弾とともに轟音を発し、大木ごとサイクロバスの右腕を焼き払った。

ブレスの硬直が解けた直後レオンはその大きな翼で飛び上がり、一気に森の外へと向かう。

右腕を焼かれたサイクロバスはその姿をただ呆然と見ることしか出来なかつた。

森の外へ出た後はすぐに着陸し、『姿解放』フォルムリリースの発動を解除する。

だがその瞬間『開放』を使つた反動で、強い脱力感と疲労感が体を蝕み、レオンは思わずその場に座り込むと体力の回復に努める。

しばらく休み、体力、魔力を回復させるとレオンはエンディミオンに戻るために“門”を開く。

「我・魔力によつて空間の法則を変え発動する。開け、ワールドゲート。」

3メートルほどの黒い門が現れ、それを開き中に入るとそこにはクラウディとの合流場所である人気のないエンディミオン魔法都市の郊外だった。

「意外と遅かつたな。」

背後から声がかかり、振り返る。

「新しい太刀を買うの忘れててちょっとしてこずつたんだよ。しかも『姿開放』も使つたしな。」

「『姿開放』を使わなきゃいけないくらいの相手が“迷いの森”に？」

？

「ああ。小型の龍とサイクロプスが居た。龍のほうはフラッシュで撒いたんだがサイクロプスがなかなか手ごわくて・・・。それよりそつちはなんか成果があつたのか？」

「もちろん。とりあえずあの2つは本物に間違いないことが分かつた。それと街でちょっと聞いたんだが南のアリア帝国が戦争の準備をしているらしい。どこを狙うのかは分からぬけど一応警戒して

おいたほうがいいと思つ。」「

「やつぱりあの2つは本物か・・・。ところでその話長老に伝えた
くていいのか？聖地はエンティミオンの平和維持とそのための人材
の育成を行つてゐるんだろ？だつたらアリア帝国がここに攻めてきた
ことを考えて準備をしておかないと。」

「その心配はないと思う。聖地にはかなり優秀な人材がそろつてゐ
し、この話ももう知つてゐるだろ？」「

「そうか。ならいいけど。」

そういつてレオンたちは魔法都市にある宿へと歩き出す。

しばらくすると何者かが自分たちを追つてゐる」と気づく。
そこでレオンは宙に魔方陣をえがく。

「我・周囲を見通す瞳を欲す。サーチアイ、発動！」

魔方陣から眼が出現し、レオンの意識と魔方陣から出現した眼がリ
ンクする。

そして半径500m以内のものを見通す。

「まあいな・・・クラウディ、囮まれたみたいだ。」

「みたいだな。徐々に気配が近づいてくる。」

その直後、四方から鎧の胸のあたりに杖と剣が交差したようなマー

クがある黒い鎧を着た者たちが出てきて、レオンたちに剣を向ける。

11章 包囲、そして逃走

レオンたちを包囲した黒い鎧の騎士たちの中から一人、唯一馬に乗っているリーダー格と思われる人物が出てくる。

「レオンとクラウディだな？持つている武器を地面に置き、大人しく捕まるんだ。やつすればこちらは手荒な真似はしない。」

もちろんレオンたちは捕まるつもりはないので武器を置きながら、小声で作戦を練る。

(レオン、どうする？)

(どうするって逃げるに決まってるだろ。俺がフラッシュシュを使つからやの隙に一気に逃げるぞ。)

(分かった。)

武器を置き終わると、数名が武器をしまじ近づいてくる。

だが、その瞬間レオンは素早く魔方陣をかき、呪文を唱える。

「我・光神の力を借り、全てを覆い尽くす光を放つ。フラッシュシュ、発動！」

レオンの魔法に気づいた騎士たちが一斉に襲い掛かるが、そのころにはもうすでに遅かつた。

あたりを白く染めるほどの閃光が放たれ、レオンを狙っていた騎士

たちは1人残らず田が眩んでしまった。

「よし、逃げるぞー。」

そう言つて走り出そうとするがなぜか足が動かない。

「レオンー早くしないと・・・。」

心配したクラウディイがレオンの元に来ようとするとレオンはそれを止める。

「クラウディイ、行つてくれ。多分何かの術に掛かった。おかげで足が動かないんだ。」

「わかつた。」

そういうとクラウディイは“聖地”のある方向へ走つていく。

「こいつらもすぐには回復するだろ? どうするかな。」

もうダメか・・・。そんなことを思つてみると突然足が動くようになる。

だがその瞬間レオンは後頭部に強い衝撃を受け、意識が薄れていく。

「よつやく捕まえた・・・。」

最後に聞いたのは、そんな一言だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5410s/>

世界の守護者

2011年12月27日19時47分発行